

論文

『耶穌教官話問答』にみる19世紀中葉の官話の一端

——『古新聖經問答』との比較を通して——

塩山正純

要旨

1860年以降、中国におけるプロテスタントによる活動が大規模に展開された発展期に、宣教師ネヴィアスとその夫人も伝道、翻訳、教育などの分野で活躍した。本稿ではこの時代の中国語研究に女性の果たした役割に焦点を当てるべく、ネヴィアス夫人がタイトルに“官話”と銘打った著作『耶穌教官話問答』（1863）を考察の対象として、同時代のカトリックによる『古新聖經問答』（1862復刻出版）とを、幾つかのことばをキーワードにして比較しつつ語史の面からその価値を検討した。本稿の考察を通して、『耶穌教官話問答』は『古新聖經問答』の語彙的特徴とほぼ重なり、場合によってはさらに口語的要素や北方語の要素をもつことが分かった。よって、同書は出版当時の1860年代の中国の北方の口語、もしくは北方の“官話”としての特徴を備えた資料の一つであると推察できるのではないかと考える。

キーワード：官話、近代西洋人の官話認識、ネヴィアス夫人、耶穌教官話問答、古新聖經問答

1. ネヴィアス夫人と『耶穌官話問答』

近代の中国でキリスト教宣教師によって漢訳聖書や漢語課本の類いが数多く著されたことはつとに知られ、こうした資料についての研究も盛んになっている。プロテスタント宣教師

の多くは夫人を伴って来華し活動した場合も多く、実はその夫人たちも教育文化の様々な方面で活躍していたのであり、その代表的な人物としてはクロフォード夫人やネヴィアス夫人を挙げることができよう¹⁾。しかし、彼女らの活動に関しては、これまで女子教育などのきわめて限られた分野しか注目を集めてこなかった。ところが、彼女らが著した書物はタイトルに“官話”と銘打ったものも多く、その多くが当時の口語に近い言語で執筆されているはずであるにもかかわらず、これまで語学の面から扱った研究は無かったと言える。

筆者はかつて「天主降生一千八百六十二年（1862年）」にカトリックの「主教若瑟瑪爾濟匪爾慕理孟（フランス・ラザリスト会士、ヨゼフ・マーシャル・ムーリー）」の許可のもとに復刻された新旧約聖書の補助読本ともいべき『古新聖經問答』という書物の語史的特徴について考察したことがあるが²⁾、本稿ではこれと僅か一年違いの1863年に上海美華書館から刊行された『耶穌教官話問答』というネヴィアス夫人の著作を考察の対象として、『古新聖經問答』と比較しつつ、同じく語史の面からその価値を検討したい。

ネヴィアス夫人は長老派の宣教師としての夫ネヴィアスの赴任に伴って1853年来華してより、途中病気による一時帰国や日本滞在なども挟みつつ、夫の死後も1901年まで中国に留まって活動した³⁾。ネヴィアス夫人による中国語の著作としては、小澤三郎（1939）は『耶穌教官話問答』『孩童故事』『浅白祷告文』を挙げるがいずれも官話で書かれたものである⁴⁾。また宮田和子（2011）はネヴィアス夫人による官話の著作としてこの他に『梅莫氏行略』『恒心守道』『伝道模範』『借債論』『勸放脚論』『入門課』『小先知积義』『東山東羅馬字初学』を挙げている⁵⁾。

『耶穌教官話問答』は1葉から21葉オモテまでの全41頁で、問答形式でキリスト教に関するトピックを扱っている。文体はタイトルに“官話”と銘打っているように口語体であることは明らかであり、『古新聖經問答』が、章立てにあたる全29端の各端の前半部分の解説文の内容を後半の問答形式で通俗的な口語体で繰り返して説明するという体裁と同様である。両書で全体にわたって使用されている文体は通俗的な口語体であることから、プロテスタントとカトリックの差こそあれ、いずれも当時の社会の幅広い階層への宣教を意図して執筆されて出版されたものであったと予想される。また、両書で用いられている語彙の中には当時の北方方言と思われるものなど、興味深いものも数多く含まれている。

2. 出版時期について

『耶穌教官話問答』は1863年に出版されている⁶⁾。いずれにしても、ネヴィアス夫妻が1853年アメリカを発って、中国に到着して寧波での任についたのが1854年、夫人は1856年に病気のため一時帰国するが、再び中国に戻り、夫妻は1859年杭州に活動拠点を移し、さ

らに日本に渡って活動したのち1861年に中国に戻り、1864年にロンドンに赴くまでの期間に執筆されたものである⁷⁾。

一方、『古新聖經問答』は著者と執筆年については不明であるが、「主教准據（主教による復刻許可）」によると、当時の中国直隸地区主教ムーリーによる復刻許可により、1862年に復刻出版されたものであり、本文に「將救世真主基利斯督耶穌釘在十字架上死、(略)自彼時・至如今・有一千八百餘年」との記述もあることから実際に著されたのは十九世紀前半であった可能性がある⁸⁾。

3. その構成について

『耶穌教官話問答』は本文が全21葉（第21葉は表の1行のみ）で、基本的には各葉1行20字の10行で構成されており、句点が用いられている。“問”“答”や記号としての“○”を除いた本文の総文字数が4393字の小品である。一方の『古新聖經問答』は、先ず「主教准據」1葉で始まり、本文は全62葉（第62葉は表のみ）で、基本的には各葉1行20字の8行で構成されており、本文・問答部分ともに句読点が用いられている。「主教准據」を含めた総文字数は19093字（旧約聖書の紹介・解説部分が9471字、新約聖書の紹介・解説部分が9466字）で、各端の冒頭には“第一端天主造世界”というふうに題目があり、前半が新旧約聖書の内容についての紹介・解説部分、後半が前半の紹介・解説部分についての問答の形式となっている。

4. ネヴィアス夫人の“官話”認識

ネヴィアス夫人には夫ネヴィアスの中国における業績を記録した二冊の著作があるが、これらには中国における言語に係ることが数多く、キーワードとしての“官話”も頻出する。たとえば「マンダリンは中国北部の全域で話されているが、地元（の言語）の特殊性は非常に顕著であり、通洲はまたそれが甚だしい。また女性の話すことは男性のそれとはかなり隔たりがあり、私たちにとってはそれを理解するのは困難である。私はマンダリンをかなり上手に話すことが出来るが、これら通州の女性とはコミュニケーションが大変である」と言う記述や⁹⁾、「夫のネヴィアスはすでにマンダリンについての知識を身につけており、説教やネイティブとの会話が可能であった」と言う記述からも¹⁰⁾、これらを記述したネヴィアス夫人と夫ネヴィアスが夫婦ともに“官話”に対して造詣が深く、なおかつ高い運用能力を有していたであろうことが窺えるのである。なお、ネヴィアス及びネヴィアス夫人の“官話”に関する認識の詳細については稿を改めて考察することとしたい。

5. 『耶穌官話問答』のことばについて—『古新聖經問答』との比較—

ここからは、ネヴィアス夫人がタイトルに“官話”と銘打って著した書物のひとつである『耶穌教官話問答』で使われている「ことば」にどのような特徴があるか、1862年に復刻出版された『古新聖經問答』のそれとを、幾つかのことばをキーワードにして比較しながら考えてみたい。

5.1 キーワードとその検討

本稿では、語史の観点を視野に入れ、口語の特徴となるものと、書面語の特徴となるもの、つまり同一の意味の新旧のことばを対にして、“狠”（或は“很”）と“甚”“沒有”と“無”“甚麼”（或は“什麼”）と“何”“這”と“此”“那”と“彼”の5組を挙げて、さらに“合、同、與、和、跟”の1組を加えて、以上の6組をとり上げて考察することにする。

5.1.1 “狠”（或は“很”）と“甚”¹¹⁾

○『耶穌教官話問答』：“狠” 0 例，“甚” 0 例

程度を表す副詞“狠”と“甚”はいずれも用例が一つもみられず、両者がつかわれても良さそうな、程度を表す文脈ではいずれも“頂”（12例）がつかわれている。

1) 【問】亞伯拉罕是誰。【答】是猶太人的祖宗。頂好的人。(07a-8)

（【問】アブラハムとは誰か。【答】ユダヤ人の先祖で、とても良い人である。）

2) 【問】他是什麼救法。【答】真神吩咐那亞造一隻頂大的船闔家在裏頭得救了。

（【問】彼はどのような救い方をしたか。【答】真の神がノアに指示して一隻のとても大きな船を作らせその中に居て助からせた。）

○『古新聖經問答』：“狠” 13 例（本文10例，問答3例），“甚” 5 例（本文3例，問答2例）

3) 地堂是狠美狠快樂的地方，叫他們享福。(01b-4)

（地堂（エデンの園）とは大変美しく大変楽しいところで、彼らに幸福を享受させた。）

4) 【問】後來的人都象他如此惡麼。【答】象他的狠多。(06a-2)

（【問】後の人間は彼のように悪いのか。【答】彼みたいなのが大変多い。）

5) 自從義斯辣爾分開國後，這樣先知聖人甚多。(23b-4)

（イスラエルが国を離れてから、このような予言者の聖人は大変多い。）

6) 【問】怎麼樣的荒亂飢餓呢。【答】是甚可慘傷的，竟有親母食其親子女者。(58a-7)

（【問】どのように混乱し、飢餓状態であったのか。【答】大変痛ましいものであり、ひどいものでは母親が実の子を食べたりした。）

『耶穌教官話問答』には“狠”（或は“很”）と“甚”の用例が皆無であることは上述の通りで、“頂”の12例は“頂有知識”“頂有榮華”“頂慈悲”“頂聖善”“頂尊貴”“頂貴重”“頂能幹”“頂大”“頂好”“頂親近”“頂少”“頂良善”で、何れも形容詞の連用修飾語としての用例である。太田辰夫（1958）は“頂”について「がんらい頭の最上部を意味し、また広く物の一番上のところをもいう。これが副詞となって《最》の意味に用いられるようになった…（中略）…清代の北京語でも普通には使われなかったが、後期からみえるようになった。あるいは南方の方言であったものかともおもう」と言うが¹²⁾、『耶穌教官話問答』の用法は必ずしもこれに当てはまらず、たんに“狠”（或は“很”）に近い意味で用いられる場合も多い。また、たとえば同じネヴィアス夫人による1883年刊『孩童故事』に“老媽兒聽見就氣的很”（09-b）のような例も多々あり、ネヴィアス夫人はほかの著作で“狠”（或は“很”）を避けている訳ではないが、『耶穌教官話問答』の中では理由は定かではないがことさらに避けていることが見てとれる。

一方、『古新聖經問答』は“狠”の13例のうち10例は、“狠美”“狠快樂”“狠苦”“狠多”“狠惡”“狠重”“狠太平”“狠仁慈”の各1例，“狠嚴緊”2例が形容詞の連用修飾語としての用例，“狠凌辱”“狠盼望”“狠畏懼”の3例が動詞の連用修飾語としての用例である。近世語で一般的な“～得很”の補語としての用例が無く、形容詞の連用修飾語としての用例が特に目立ち、字体は全て“狠”である。“甚”もすべて形容詞、動詞の連用修飾語であるが、用例は“甚多”“甚好”“甚明白”“甚可慘傷”で計5例しかない。

「5.1.1」の結果としては、ネヴィアス夫人が他の著作では普通につかっている“狠”（或は“很”）を『耶穌教官話問答』ではことさらに避けていること、『古新聖經問答』では“狠”が形容詞の連用修飾語として多く用いられ、数の上でも“狠”が“甚”よりも優勢であるということがわかる。

5.1.2 “沒有”と“無”について

○『耶穌教官話問答』：“沒有”11例，“無”12例

7) 【問】有別的的神嗎。【答】沒有廟裏的偶像算不得神不過是人做出來的東西有名無實除了真神以外實在沒有別的神。(01b-5, 6)

(【問】ほかの神はありますか。【答】ありません。廟の偶像は神とは言えない、ひとが造ったモノで、名ばかりで実がありません。真の神以外に、本当に別の神はありません。)

8) 【問】耶穌沒有生在世上前頭是在什麼地方呢。【答】神造萬物前頭耶穌同神在一塊兒並且耶穌就是神。(09a-4)

(【問】イエスがこの世に生まれる前はどこにいましたか。【答】神が万物を造る前にイ

エスは神と一緒にいて、しかもイエスこそが神でした。)

- 9) 【問】能看見真神嗎。【答】不能看見他是個靈看不見的無形無像無生無死…… (01b-1, 2)
 (【問】真の神は見えますか。【答】見えません。それは霊で、見えないものです。「形」が無く、「像」が無く、「生」が無く、「死」が無く……)
- 『古新聖經問答』：“沒有” 31例 (本文 6例, 問答 25例), “無” 34例 (本文 28例, 問答 6例)
- 10) 但他們許過天主的, 全沒有遵行。(15a-2)
 (しかし彼らは天主に約束したことを, 全く守らなかった。)
- 11) 【問】那時候別處還有祭獻天主的聖堂沒有。(22b-1)
 (【問】その時, 別のところにも天主を祭る聖堂はあったのか。)
- 12) 彼時不用衣服, 因為性情未壞, 並不羞愧, 且無各樣苦難災病死亡等事。(01b-7)
 (その時, 彼らは衣服を身につける必要がなかった。なぜならば心が未だ乱れておらず, 羞恥心など無く, そして様々な苦難, 病難, 死亡なども無かったからである。)
- 13) 【答】無水地方, 他們飲甚麼。(13a-2)
 (【答】水のないところで, 彼らは何を飲んだのか。)

『耶穌教官話問答』は用例数こそ“沒有”と“無”でほぼ同じであるが, “無”の用例は“無形”“無像”“無生”“無死”“無實”“無罪”“無窮”“無盡”“無私”など, ほぼ一音節の目的語を持つ動詞としての用法に限られ, これらはいずれも一つの語彙とも見做せる結びつきの強いものである。“沒有”は“沒有別的神”“沒有別的法兒”などの多音節の目的語を持つ場合や, 完了・実現を問う「問(とい)」に対してひと言で“沒有(いいえ)”と答える場合, “還沒有受審判”のように完了・実現を否定する場合に用いられている。一音節の“沒”もあるが, 用例は一音節の目的語を持つ“沒大沒小沒先沒後”と完了・実現を否定する“沒淹死”の各1例である。

一方, 『古新聖經問答』は“沒有”は31例で, 単独の“沒”は無い。太田辰夫(1958)に準句末助詞の項で「《沒有》も完了または過去のばあい用いる。これが用いられるようになったのは明代である。」という説明があるが¹³⁾, “沒有”の31例のうち, 13例はいずれも問答の「問(とい)」で句末におかれて疑問文をつくる。香坂順一(1983)の“~沒有”の項は「王力の《中国現代語法》上冊 p. 254に存在の‘有’の否定の‘沒有’と疑問文をつくる‘沒有’の使用法について, “連個規矩都沒有”, 不能說成“連個規矩都沒”, “吃葯沒有”不能說成“吃葯沒”といっている。」とするが¹⁴⁾, 『古新聖經問答』での句末疑問“~沒有”の用例はすべて王力の説に同じ用法である。句末疑問“~沒有”以外の18例では, 動詞の完了・実現を否定するものが“沒有離開”“沒有遵行”“沒有沾染”“沒有燒死”“沒有許下”など14

例、「ない」という意味では4例である。“無”は34例あるが、名詞で「無(む)」を表す3例を除き“無數”“無比”“無碍”“無心”“無用”“無奈”“無益”“無形”“無像”“無異”“無罪”など31例の“無”は動詞で、いずれも単語として考えられてよいものである。

「5.1.2」の結果としては、いずれの資料でも“無”は単語の一部としての用例が目立ち、“沒有”の動詞の完了・実現を否定する用法では共通しており、『耶穌教官話問答』はさらに完了・実現を問う「問(とい)」に対してひと言で“沒有(いいえ)”と返答する場合にも使われる。とくに『古新聖經問答』では問答部分で“沒有”が多くなり、句末反復疑問の“沒有”が多用される傾向がある、ということが出来る。いずれの資料も“沒有”と“無”の機能分担がはっきりしていると言える。

5.1.3 “甚麼”と“何”について

○『耶穌教官話問答』：“甚麼”1例，“什麼”62例，“何”0例

14) 不拘做甚麼都要照耶穌的榜樣。(20a-6)

(なにををするにしても、いずれもイエスの手本に照らさねばならない。)

15) 起頭造出來的一男一女是什麼名子。(5a-1)

(最初に造られた一男一女はどんな名前か。)

16) 真神吩咐他什麼呢。(5a-7)

(真の神は彼に何を申し付けたか。)

○『古新聖經問答』：“甚麼”85例(本文2例，問答83例)，“何”24例(本文5例，問答19例)

17) 【問】他們在曠野地方喫甚麼。(13a-1)

(【問】彼らは荒野で何を食べたのか。)

18) 【問】講的是甚麼道理。(39a-1)

(【問】説いたのはどんな道理か。)

19) 【問】彼時教友，有何不善之事，致外教人如此殘害。(60a-1)

(【問】その時、信者は、どのような善くないことをして、異教徒のこのような虐殺を招いたのか。)

『耶穌教官話問答』は表記の違いがあるが“甚麼”1例，“什麼”62例の合計63例に対して，“何”は用例が無い。用例は“做甚麼”1例，“什麼”単独の24例，“什麼意思”9例，“什麼事情”“什麼名字”“什麼地方”“什麼兩個樣”“什麼話”各2例，“什麼刑罰”“什麼法兒”“什麼樣”“什麼救法”“什麼罪”“什麼道理”“什麼緣故”“什麼禱告文”“什麼兩個樣”“什麼應許的話”“什麼時候”“什麼禮”“什麼祭”“什麼別的話”“什麼大事”“什麼不是”“什

麼名分”各1例，そして“為什麼”の3例がある。

一方の『古新聖經問答』は“甚麼”が85例に対して“何”が24例あるが、特に問答部分での用例数は“甚麼”が“何”の4倍強であり、このほか“為甚麼”も24例ある。“為甚麼”の全てと、“甚麼”の83例が、問答部分の「問（とい）」の疑問文に用いられている。“甚麼”単独は47例で、“～是甚麼”“甚麼是～”など「～とはなにか？」というふうに用いられている。その他“甚麼地方”5例，“甚麼聖跡”4例，“甚麼時候”4例，“甚麼道理”3例，“甚麼事情”“甚麼意思”の各2例，“甚麼式樣”“甚麼約”“甚麼邪像”“甚麼苦難”“甚麼益處”“甚麼賞”“甚麼本分”“甚麼規矩”“甚麼憑據”“甚麼表樣”“甚麼苦”“甚麼刑罰”“甚麼奇事”“甚麼緣故”“甚麼權”“甚麼效驗”“甚麼別的效驗”“甚麼奧妙的事情”の各1例など38例である。“何”は“為何”の3例を含めて計24例で、単独での用例は“何為天主教經”の1例のみであり，“何處”7例，“何時”“何人”の各3例，“何樹”“何物”“何事”の各1例の計16例のように、三分の二が単音節語につき、二音節語では“何效驗”の1例のみである。この他に“有何不善之事”1例がある。単独での用例数は“甚麼”の47例にはるかに及ばない。また，“為甚麼”の24例に対しても“為何”はわずか3例である。また“怎麼”の意味にあたる“何”は“何不將古聖若瑟的行實・細講一講”“何能想望天上之光榮”の2例である。

5.1.4 “這”と“此”について

○『耶穌教官話問答』：“這”21例，“此”0例

20) 這不是三個神嗎。(02a-5)

(これは三つの神ではないのですか。)

21) 這麼說吃一點菓子有這樣大的罪嗎。(06a-9)

(と言うことは、少しの果物を食べたならこのように大きな罪になるのですか。)

○『古新聖經問答』：“這”82例(本文52例，問答30例)，“此”49例(本文45例，問答5例)

22) 這是天主造人的本意。(01a-7)

(これは天主が人間をおつくりになった本来の考えである。)

23) 【答】耶穌降福葡萄酒，向宗徒說，這是我的血，就是我新約的血。(43b-7)

(【答】イエズスは葡萄酒を祝福して、使徒たちに、これはわたしの血である、これこそがわたしの新約の血である、と言われた。)

24) 向他們說，此即我之身體。(42b-1)

(彼らに、これがすなわちわたしの身体である、と言われた。)

『耶穌教官話問答』は“這”21例に対して“此”は用例が無い。“這”21例のうち指示代

名詞として単独で用いられているのは2例のみで、“這個”5例，“這麼”3例，“這樣”3例，“這個時候”2例，“這些”“這一天”“這菓子”“這麼樣”“這大大的本分”“這裏”各1例である。

一方、『古新聖經問答』は“這”が82例，“此”が49例あるが、問答部分は“這”が圧倒的に多い。“這”は単独での用例が25例で最も多いが、場所を表すものは無く、その他“這個”14例，“這樣”7例，“這些”6例，“這一支”3例，“這十誡”3例，“這百姓”“這十二個兒子”“這十二個的”“這聖跡”“這巴斯卦”“這結約櫃”“這加那昂福地”“這聖櫃”“這異端邪教”“這體面”“這兩國”“這一座天主堂”“這聖神”“這一位聖神”“這許多先知”“這一家”“這世上”“這一位聖子”“這十二個”“這耶穌”“這一日”“這奧妙事情”“這記號”“這兩樣子書”各1例などの用例があるが、いずれも単音節語にはつかない。“此”の31例は、単独で「これ」という意味のものは8例で，“此時”7例，“此處”6例，“此罪”5例，“此日”2例，“此果”“此國”“此等”“此事”“此石”“此禮”“此刑”“此人”“此位”の各1例などはいずれも単音節語についている。二音節以上の語を修飾するのは，“此重罰”2例，“此祭臺”“此恭敬邪神之黨”“此三王”“此毒虐”“此致命者”のみである。このほか“因此”が2例，“如此”“為此”が各1例で、あとは場所を表す“在此”が2例ある。

5.1.5 “那”と“彼”について

○『耶穌教官話問答』：“那”3例，“彼”0例

25) 【問】到那時候耶穌和不信的人要說什麼話。(19a-7)

(【問】その時になったらイエスは信じない人にどんなことを話すのか。)

26) 到那時候耶穌和相信他的人要說什麼話。(19a-9)

(【問】その時になったらイエスは彼を信じている人にどんなことを話すのか。)

○『古新聖經問答』：“那”52例(本文24例，問答28例)，“彼”37例(本文25例，問答12例)

27) 【問】難道那時候，沒有一個天主所愛的人麼。(06a-2)

(【問】その時，天主が愛された人間が一人もいなかった訳ではあるまい。)

28) 宰一隻羊羔，燒着喫，那羊羔的血，刷在每家門上，以為記號。(10a-2)

(一匹の子羊を殺し，焼いて食べ，その子羊の血を，各家の入り口に塗り，目じるしとするように命じた。)

29) 彼時天主罰長蟲，說後來要從女人中生一位壓長蟲頭的。(03a-1)

(その時，天主は蛇を罰して，後に，女の人のなかから一人，蛇の頭を踏みつける者が誕生するであろう，と言われた。)

『耶穌教官話問答』は“那”と表記されるものは24例あるが、うち19例は“哪”の意味での用例で、2例は音訳語“那亞(ノア)”の音に当てられた漢字としてのもので、指示詞としては3例(“那一天”1例, “那時候”2例)のみで極めて少なく、また“那”が単独で、ものや場所をさす代詞としての用例はない。また“彼”は用例が無い。

一方、『古新聖經問答』は“那”と表記される61例のうち、“哪”にあたるのが9例で、実数は52例であるが、やはり“那”が単独で、ものや場所をさす代詞としての用例はない。場所を表すものでは“那裡”の4例, “那地方”の1例があるが、他はすべて“那時候”16例, “那些”12例, “那十支”4例, “那時”2例, “那邪神”2例と“那個”“那羊羔”“那買他的人”“那一夜”“那單為顧肉身的”“那要改過遷善的人們”“那無心悔罪的人”“那博學”“那仇害耶穌的人”“那十字架”“那一年”(各1例)のように指示詞としての用例である。“彼”は37例のうち“彼時”が29例を占め, “彼處”“彼此”が各3例, その他, “從彼而來”“任彼殘害”各1例がある。

「5.1.3」「5.1.4」「5.1.5」の結果としては, “那”については『耶穌教官話問答』に用例自体が極めて少ないものの, 総じてこの二つの資料では“何”に対して“甚麼”或は“什麼”が, “此”に対して“這”が, “彼”に対して“那”が非常に多く使用されている, ということが分かり, 『耶穌教官話問答』ではさらに明確な口語的な傾向を見てとることができる。

5.1.6 介詞としての“合, 同, 與, 和, 跟”について

- 『耶穌教官話問答』: “合” 0例, “同” 3例(接統詞5例), “與” 0例(動詞が1例), “和” 6例(接統詞5例), “跟” 0例
- 30) 魔鬼變一個長蟲の様兒同女人說話哄誘他。(05b-10)
(悪魔は一匹の蛇の姿に変化して女に話しかけて誘惑した。)
- 31) 有那亞一個人同他一家的人沒淹死。(07a-3) [接統詞]
(ノア一人と彼の一家は溺れ死にませんでした。)
- 32) 有人看見和他來往嗎。(11a-1)
(彼と行き来するのを見かけたひとはありますか。)
- 33) 第六天造出六畜和一切昆蟲野獸末了造出一男一女是世上的人頭一代的祖宗。(04b-4)
[接統詞]
(六日目に六種類の家畜と一切の昆虫野獸を造り, 最後の一男一女を造りました。その一男一女は世界の人間の第一代の先祖です。)
- 『古新聖經問答』: “合” 2例(本文2例, 問答0例), “同” 32例(接統詞を含んで, 本文22例, 問答10例), “與” 20例(接統詞を含んで, 本文15例, 問答5例), “和” 0例, “跟” 0例

- 34) 那時候，有如達瑪加伯，同他兄弟們，帶着兵器，合外國的惡人爭戰，(略) (28a-5)
(その時，ユダ・マカベが，彼の兄弟たちとともに武器を手に執り，外国の悪人と戦い……，)
- 35) 與耶穌預先合他說的話相同。(43a-3)
(イエズスが前もって彼に言われた話と同じである。)
- 36) 天主為定一個同他立約的憑據，命他行割損的禮，(07a-8)
(天主は彼と約束したことの一つの証を定めるために，彼に割礼をさせ……，)
- 37) 【答】是如達瑪加伯，同他的弟兄們。(29a-1)
(【答】ユダ・マカベと彼の兄弟たちである。)
- 38) 此與前輩先知所預言者無異也。(34b-4)
(これは先の予言者が予言したものと違うところが無いのだ。)
- 39) 他們都預先說過，撒瑪里亞，與日露撒冷府，後來全要毀壞。(23b-8)
(彼らはともに，サマリアとイエルサレムの町は後にどちらも破壊されることになっている，と予言していた。)

『耶穌教官話問答』は用例をもつのが“同”と“和”の二つのみで，しかも“同”が介詞3例に対して接続詞5例，“和”が介詞6例に対して接続詞5例で，いずれも用例数が僅かしかない。

一方、『古新聖經問答』は“合”の2例はいずれも介詞としての用法で，“同”は32例あり介詞と接続詞のいずれも用法ももっている。“與”の20例は介詞14例，接続詞5例，動詞が1例である。

太田辰夫(1958)は，“合”については「《和》と同様に用いられるが，時代ははるかに降る。」として介詞としての用法のみを挙げ，“同”については“《同》《同着》”の項で「《同》は以上のように多く介詞として用いるが時としては連詞として用いることもある」とする¹⁵⁾。

また太田辰夫(1958)は“跟”の項で「動詞としては或者の後につづくこと。これが介詞化したものも，やはりつき従う意を失っていない。例えば，我們只在太太屋裏看屋子，不大跟太太姑娘出門(紅82)(わたしはただ奥様のお部屋で番をするだけで，あまり奥様お嬢様について外に行くことはありません)これが共同の介詞または連詞として用いられた例はきわめて新しいようである。」と説明するが¹⁶⁾，共同の介詞または連詞としての“跟”は二つの資料ともに1例も見られない。

「5.1.6」の結果としては，二つの資料で共通して用いられているのが“同”のみである。『耶穌教官話問答』はこのほかに“和”の用例をもつが，いずれにしても介詞，接続詞の用

例自体が少ない。一方で『古新聖經問答』は“合”が介詞としての用法のみで，“同”が介詞，接続詞の用法をあわせ持ち，書面語の特徴である“與”が問答ではなく解説の部分で圧倒的に多く，一定の使い分けがあると見ることもできる。

5.2 その他のことばについて

ここからは『耶穌教官話問答』に見られるその他の特徴あることばの幾つかについて，適宜『古新聖經問答』と比較しながら見てみたい。

5.2.1 口語的特徴的なもの

とくに『耶穌教官話問答』では極めて口語的な語彙や表現が使われていることから，ここで幾つかの特徴ごとに該当する語彙・表現と用例（各1例）を挙げておく。

- (1) 結果補語を用いる：“看見” 5例，“分開” 3例，“定好” 3例，“離開” 1例，“聽見” 1例，“受傷” 1例。
- 40) 【問】 聖書是怎麼樣分開了。【答】 聖書是分新約舊約。(02a-9)
 (【問】 聖書はどのように分かれていますか。【答】 聖書は新約と旧約に分かれています。)
- (2) 可能補語を用いる：“看不見” 1例，“算不得” 1例。
- 41) 【問】 能看見真神嗎。【答】 不能看見他是個靈看不見的。…… (01b-1)
 (【問】 真の神を見ることはできますか。【答】 見ることはできません。それは靈で見えないものなのです。……)
- (3) 複合方向補語を用いる。“造出來” 3例，“降下來” 3例，“生出來” 1例，“趕出去” 1例，“摘下來” 1例。
- 42) 是真神造出來的。(01a-1)
 (真の神が造りだしたものです。)
- (4) 反復疑問を用いる。“好不好” 2例，“可以不可以” 2例，“可行不可行” 1例。
- 43) 亞當夏娃的子孫好不好。(14a-6)
 (アダムとエヴァの子孫は(行いが)良かったか良くなかったか。)
- (5) 方位詞“上”“裏”が頻出する：“世上” 11例，“天上” 6例，“十字架上” 2例，“聖書

上” 1例, “地上” 1例, “那裏” 8例, “這裏” 1例, “廟裏” 1例, “水裏” 1例, “子孫裏” 1例, “教門裏” 1例, “心裏” 1例, “墳墓裏” 1例, “地獄裏” 1例, “嘴裏” 1例。

44) 釘死在十字架上。(10b-4)

(十字架に磔にされて亡くなった。)

(6) 接尾辞“頭”“子”が頻出する: “裏頭” 8例, “起頭” 3例, “後頭” 5例, “前頭” 2例, “饅頭” 1例, “菓子” 7例, “日子” 5例, “身子” 5例, “名子” 3例, “兒子” 1例。

45) 到世未了的日子要來審判世上的人。(19a-2)

(世の中の終末の日に世の中の人を審判しにいらっしゃる。)

(7) 量詞が頻出する: “個” 30例, “條” 25例, “本” 1例, “棵” 1例, “隻” 1例, “句” 2例, “回” 1例, “件” 1例。

46) 真神吩咐那亞造一隻頂大的船闖家在裏頭得救了。(14a-6)

(真の神がノアに指示して一隻のとても大きな船を作らせその中に居て助からせた。)

(8) 重ね型の副詞(或は形容詞重ね型)を用いる: “統統” 6例, “常常” 4例, “好好” 3例, “多多” 1例, “殷殷勤勤” 1例。

47) 世上的人統統在水裏死了嗎。(14a-6)

(世の中の人はずべて水の中で死んだのですか。)

これ以外にも、二つの資料ともに助詞“的”はごく普通に用いられるのは言うまでもなく、三人称は“他”“他們”が用いられており、『耶穌教官話問答』では一人称、二人称も“我”“我們”“你”“你們”が用いられている。一方で『古新聖經問答』では1箇所のみ三人称に“伊”を用いて「惡魔」を指している。

5.2.2 北方語の特徴的なもの

ここでは『耶穌教官話問答』『古新聖經問答』で共通して用例のある北方語の特徴的な語彙の幾つかを挙げておく。

(1) “不拘”

○ 『耶穌教官話問答』

- 48) 我不拘要什麼求真神給我就是禱告。(14a-6)
(わたしはどんなことを求めるのでも真の神にわたしに下さるように求める。つまり祈りである。)
- 49) ……大小的事都要依真神的吩咐不拘做甚麼都要照耶穌的榜樣。(20a-6)
(……大きな事も小さな事も全て真の神の教えに依って、何をするのでも全てイエスの手本に照らさねばならない)
- 『古新聖經問答』
- 50) 除此以外，地堂內不拘何樹之果，全許他們食。(01b-5)
(このほかに、地堂（地上の天国。エデンの園）のうちの何れの樹の果実も、全て彼らに食べてもよいと言われた。)
- 51) 【問】至今這個罪惡還有麼。【答】還有，不拘何人，生在世上全帶此罪。(04b-4)
(【問】いまに至るもこの罪惡はまだあるのか。【答】まだある。何人に関わらず、この世に生きている者はいずれもこの罪を持っている。)
- (2) “長蟲” (蛇)
- 『耶穌教官話問答』
- 52) 魔鬼變一個長蟲的樣兒同女人說話哄誘他。(05b-10)
(悪魔は一匹の蛇の姿に変化して女に話しかけて誘惑した。)
- 『古新聖經問答』
- 53) 他們單想引誘人反背天主，有一個魔鬼附了長蟲，引誘厄娃食天主所禁止的命果。(02b-7)
(彼らはただ人間を天主に背くように誘惑しようとばかり考えていた。ある悪魔が蛇にのりうつって、天主が食べるのを禁じた命の果実を食べるようにエヴァを誘惑した。)
- 54) 【問】他怎麼誘惑了第一個人。【答】附了長蟲，先誘厄娃食命果。(03b-7)
(【問】悪魔はどのように最初の人を誘惑したのか。【答】蛇にのりうつって、先ずエヴァに命の果実を食べるように誘惑した。)
- (3) “土” (塵)
- 『耶穌教官話問答』
- 55) 人的身子已竟爛壞歸了土還能復活嗎。(18b-4)
(ひとの身体がすでに朽ちて塵に帰っても復活しますか。)
- 『古新聖經問答』
- 56) 天主用土造了人的肉身，又賦給一個象似天主的靈魂使他生活，(01a-5)

(天主は塵を用いて人の肉体をつくり、またそれに天主に似た靈魂を授け、この世に生を与え……、)

57) 【問】天主用甚麼造第一個人。【答】用土造肉身。(02a-4)

(【問】天主は何を用いて最初の人をつくったのか。【答】塵を用いて肉体をつくった。)

とくに『耶穌教官話問答』と『古新聖經問答』ともに無条件文の従接を導くのは“不拘”のみで“無論”“不論”はいずれも用例が無い、ということが特徴の一つであると言えよう。ちなみに“不拘”については、太田辰夫(1958)が『醒世姻縁伝』の用例「不拘甚麼飲食・我吃不下去了(どんなたべ物でも、わたしはのどをとおらなくなった)」を挙げて「《不拘》は清代ではきわめて多く用いられた。」と説明し¹⁷⁾、さらに『紅樓夢』や『兒女英雄伝』でも多用されることから、北方語の特徴の一つと見ることができよう。名詞では「へび」の意味で“蛇”ではなく“長蟲”を用い、「塵(ちり)」の意味で“土”を用いたりすることも北方語の特徴である。このほかに兒化(アール化)は『古新聖經問答』には用例が無いものの『耶穌教官話問答』では“一塊兒”7例、“名兒”5例、“法兒”3例、“樣兒”“那兒”の各2例、“樣兒”“一點兒”各1例の用例がある。

6. 小結

以上の考察を通して見てきたように、書名に官話を明記する『耶穌教官話問答』は全体を通した問答形式のやり取りが口語としての要素によって成り立っていることが分かる。一方の『古新聖經問答』の本文は、口語、書面語の特徴となる語彙の用例数が大差ないが、問答部分では『耶穌教官話問答』と同じく明らかに口語の特徴となる語彙を用いて成り立っている。『古新聖經問答』で用いられているのは、塩山正純(2000)でも指摘したように、同書が復刻された1862年当時か、或いは同書序文の「將救世真主基利斯督耶穌釘在十字架上死・(略)自彼時・至如今・有一千八百餘年」にいう19世紀前半の中国の北方の口語であった、若しくは限りなく北方の口頭語に近いものであったとも推察できる。だとすると、本稿の考察を通して、『古新聖經問答』の語彙的特徴とほぼ重なり、場合によってはさらに口語的要素や北方語の要素をもつことが分かった『耶穌教官話問答』も語彙の面で出版当時の1860年代の中国の北方の口語、もしくは北方の“官話”としての特徴を備えたものであったと推察できるのではないと思われる。そして、『耶穌教官話問答』や『古新聖經問答』のような存在は、19世紀以降にプロテスタントの活動が顕著になってからも、カトリックによる中国語による翻訳出版も依然として続き、両者の学んだ中国語の特徴には大きな隔たりはなく、レベルもかなりのものであったことを物語っている。19世紀の中国語の“官話”(或は

口語) がいかなるものであったかを考えていく上で、当時のこうした一連の問答系の資料に用いられていることばから、我々は非常に大きなヒントを得ることが出来るのではないかと考える。

注

- 1) 吉田寅 (1997) によると、19世紀の中国におけるプロテスタントによる伝道は、天津条約・北京条約の締結を境として、キリスト教禁制時代の開拓期 (1860年以前) と、条約により伝道が公認されて以降の発展期の二期に分けられる。ネヴィアス夫妻やクロフォード夫妻が活躍したのもこの1860年以降の伝道活動が大規模に展開された発展期にあたる。
- 2) 塩山正純 (2000) 『『古新聖經問答』の語彙からみた19世紀初頭の口語』参照。資料としては塗宗濤点校『古新聖經問答』(1992年12月・天津社会科学院出版社影印)を使用した。本稿でも同資料を使用する。
- 3) 小澤三郎 (1939) 「支那在留宣教師 J. L. ネヴィアスと日本との関係」及び宮田和子 (2011) 「19世紀入華宣教師 J. L. ネヴィアスの栄光と影」参照。
- 4) 小澤三郎 (1939) 32頁。
- 5) 宮田和子 (2011) 53-54頁。
- 6) Wylie, A. (1867) は “Christian Catechism in the Mandarin Dialect. 21 leaves. Shanghai, 1863.” とし、小澤三郎 (1939) 32頁は「耶蘇教官話問答 一八六三年、上海、廿一枚、官話。一八七〇年、卅七頁。一八七〇年、四六頁、8vo.」とする。また、オックスフォード大学 Bodleian Libraries には1863年、1868年、1883年の三つの版本が所蔵されており、本稿では Bodleian Libraries 所蔵の1863年版を資料とした。
- 7) 宮田和子 (2011) 50-51頁。
- 8) ムーリーこと Mouly Joseph Martial (1807-1868) は、フランス籍のラザリスト会士で1856年から直隸 (河北省の旧名) の主教を務めた。中国語名は孟振生。また、佐伯好郎 (1949) は『『古新聖經問答』は ((フランス籍の一筆者注) 耶蘇会士の著で、新旧両約聖書に関する問答)』とする。『古新聖經問答』の著者については塩山正純 (2000) と同じく考察の対象とはしない。また、ムーリー主教の復刻許可 “中國聖教書籍雖甚繁蹟然究論古新聖經者甚稀余於書篋得古新聖經問答一冊披閱之下甚喜此書典訓切實於教中信友大有裨益雖其文詞庸俗然便於人人通曉能使閱者洞明聖教原始要終之道顯揚天主撫育保存之恩凡誠心事主之人自克全其信望愛之德矣故付剞劂以公同好聊為教眾熱心之一助云” からも明らかなように、『古新聖經問答』は「読む者」にとっての「言葉の分かりやすさ」故に復刻を許可されており、主教の担当する直隸で広く読まれることを期待したことが分かる。
- 9) Nevius, Helen (1876) p. 380参照。原文は以下の通り：Although Mandarin is spoken all over the north of China, local peculiarities are very marked. Tung-chow is full of provincialisms. Moreover, “women’ s talk” is very different from men’ s, and it is much harder for us to understand them, or they us. I can speak Mandarin pretty well, but make wretched work with these Tung-chow women.
- 10) Nevius, Helen (1895) p. 212参照。原文は以下の通り：Mr. Nevius had already some knowledge of Mandarin, and was able at once to begin preaching and conversing with the natives.

- 11) “狼”については、太田辰夫(1988)が「“很”は、…(中略)…作品中で普通に使われるようになったのは『紅樓夢』など清代北京語文学からである。清代の作品でも『儒林外史』などの用法は明代に同じ。現代でも西安・貴州など、西南の官話では、補語にのみ用いる。」と説明する。
- 12) 太田辰夫(1958) 269頁。また、同書177頁には「《頂》は元明から清代全期の資料では絶無というも過言ではない。おそらく、北方語ではなく、清代後期到北京語に入ったものかとおもわれる」とある。
- 13) 太田辰夫(1958) 393頁。
- 14) 香坂順一(1983) 237頁。
- 15) 太田辰夫(1958) 265頁。
- 16) 太田辰夫(1958) 265頁。
- 17) 太田辰夫(1958) 343頁。

参考文献

- Wylie, A. (1867) *Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese: Giving a List of Their Publications, and Obituary Notices of the Deceased. With Copious Indexes.* (Shanghai: American Presbyterian Mission Press)
- Nevius, Helen (1876) *Our Life in China.* (New York: Robert Carter and Brothers)
- Nevius, Helen (1895) *The Life of John Livingston Nevius.* (New York: Fleming H. Revell Company)
- 小澤三郎(1939)「支那在留宣教師J L ネヴィアスと日本との関係—神道総論, 天路指南, の著者—」
基督教史研究会『基督教史研究』第6冊23-39頁
- 佐伯好郎(1949)『清朝基督教の研究』春秋社
- 香坂順一(1983)『白話語彙の研究』光生館
- 太田辰夫(1988)『中国語史通考』白帝社
- 吉田寅(1997)『中国プロテスタント伝道史研究』汲古書院
- 塩山正純(2000)「『古新聖經問答』の語彙からみた19世紀初頭の口語」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』第5号77-94頁
- 宮田和子(2011)「19世紀入華宣教師J. L. ネヴィアスの栄光と影」近代東西言語文化接触研究会『或問』第20号49-58頁